

つれあいは外へ出るのがイヤになりました。スパーで会って「お気の毒様」と言われてもどうしようもない、何の言葉をかけられても受け入れられない。

私も二ヶ月ほど全ての仕事をやめて家にいました。娘の書いた日記を全部パソコンに打ち直した、そんな作業をしていました。持病が悪化し、体調を崩しました。

嘆きは消えぬ消えずともよし

住職が暗い顔をしているので、ご門徒が歌人伊藤左千夫の歌を紹介してくれました。

み仏に 救はれありと思ひ得ば
嘆きは消えぬ 消えずともよし
七枝ちゃんという、伊藤左千夫の一歳半の娘さんが溺れて亡くなった。医者に連れて行つたけれども間に合わなかった。びつくりして悲しんで悲しんで、一歳半ですから、仏さまの教えも聞いていない、仏さまの国へいったらどうか、不安になったんです。大丈夫だと思

つたならば嘆きは消えるだろうか、そんな簡単に消えるものではない、いや消えずともよし、一生涯私はそのことを背負うていこうというのが「嘆きは消えぬ消えずともよし」、実の事実を引き受けていくんです。ああでもないこうでもない、言い訳をするんじゃない、悲しいけれども事実を引き受けていく。

同悲同苦

そんな中で、話は飛びますけど、ひとつ教えられたことがあります。私の父がその年の十二月

に亡くなりました。私の娘が七月に亡くなりましたので挨拶に行きました。そしたら「なんぞだ、どうしてだ、なあ」というだけでした。父は悲しみが分からないのかな、認知症気味なのかな、それから二度行きましたが娘の話は出ませんでした。

父が亡くなり、遺体を整えている時に、兄が私たち夫婦に言った



いるんです。だから私の父親は娘を亡くした悲しみが分かるはずなんです、分かるからこそ軽々しく言えないことに悩んでいた、「同悲同苦」、悲しみ苦しみを共にするということ、多くの人が私といつしよに涙して下さっていたことを教えられました。

人生に春夏秋冬

そこで最後に申し上げることは、司馬遼太郎の「人生に春夏秋冬がある」という言葉。柳田邦男という方の息子さんが亡くなった。息子(洋二郎)さんが亡くなったことを本に書いて送ったら、司馬遼太郎さんが言葉を送って下さった。

御胸中の万分の一を察し入りつつ、人間のいのちが両親や他の人々にいたわられつつ辛うじて存在していること、いたわりが千万倍ふえようと、掌中の露の玉のように指の間から落ちてゆくこと、そのはかなさ、それは、内村鑑三

のことは強いてあげれば「勇ましく高尚」なものであるかと存じます。吉田松陰は洋二郎さんより、二、三歳上でもって生涯を終えました。「人は、たとえ六十、七十であろうと、二十五、六であろうと、春夏秋冬というのがあるのだ。悔ゆることはない」と死の直前に書きました。われわれは馬齢でありました。二十五歳は宝石であります。まことにまことに。

これを私の友達が送ってくれました。これを読んで私はつくづく思いました。娘の二十五年の生涯というものの中に春夏秋冬がある。ただ私が娘に執着すれば、「もつともつと生きてほしかった」が私の心なんです。じゃあ娘の二十九歳の生命はそれで無駄かということ、二十九歳の中に春夏秋冬があったんだ、むしろわれわれのいのちほど馬齢(世に認められるような仕事もせず、いたすらに年だけ取っているという謙遜した表現)である、ただただ年をとってきたというよりも二十六歳の洋二郎君のい